

宇野理論形成の思想的背景*

— 純粋と模倣 —

大黒弘慈

目次

はじめに	2
(1) 日本資本主義論争批判 (1935) — グローバリズム批判 —	6
(2) 原理論・段階論と理念型 (1936) — ヴェーバーとスピノザ —	11
(3) 自由銀行論と中央銀行論 (1941) — バジヨット翻訳の意味 —	14
(4) 循環の弁証法と移行の弁証法 — 純粋資本主義論の「矛盾」 —	16
(5) 価値形態における「人間」 (1948) — 近代化批判のかなめ	18

* 本稿は、大黒[1999][2003][2007]に拠りつつ、これに加筆・訂正を施したものである。

はじめに

マルクスは『資本論』第1巻第1版の序文で次のように述べている。

「物理学者は、自然過程を観察するにさいしては、それが最も内容の充実した形態で、しかも攪乱的な影響によって不純にされることが最も少ない状態で観察するか、または、もし可能ならば、過程の純粋な進行を保証する諸条件のもとで実験を行なう。この著作で私が研究しなければならないのは、資本主義的生産様式であり、これに対応する生産関係と交易関係である。その典型的な場所は、今日までのところでは、イギリスである。これこそは、イギリスが私の理論の展開の主要な例解として役だつことの原因なのである。とはいえ、イギリスの工業労働者や農業労働者の状態を見てドイツの読者がパリサイ人のように顔をしかめたり、あるいは、ドイツではまだまだそんなに悪い状態にはなっていないということで楽天的に安心したりするとすれば、私は彼に向かって叫ばずにはいられない。ひとごとではないのだぞ！」(マルクス[1867]: 23)

マルクスは、資本主義生産様式の分析に際して「純粋性」の確保にことさらに注意を促している。経済学者を物理学者になぞらえ、資本主義社会もまた無菌の実験室のように確保できるかのように見なす素朴な科学主義と、イギリス資本主義の発展経路を典型とみなし、それを後進資本主義国ドイツの経路にそのまま機械的に適用しようとする単線史観は、ほかでもないマルクス自身に胚胎していたのであり、これを捉えて、しかもマルクスの真意を生かす形で、この「純粋」の意味を換骨奪胎したのがほかでもない宇野弘蔵であったことは、あらためて確認するに値する。

たとえば宇野は次のように述べている。

「…**価値法則**も、吾々の行動のゆきすぎを吾々の行動自身によって訂正せしめるものとしてあるわけで、その形態は、当然にゆきすぎをいれうるものでなければならない。ゆきすぎが訂正されたところで形態を明らかにするというのは、無意味になる。この点は、マルクスが理論的研究には、必ず想定されなければならない**純粋の資本主義社会**に、資本主義の発展とともに近づいてくるといった、吾々の経済学の対象の自然現象とは全く異なった特殊性とも関連することになる。**法則性が向側にあるのではない**という意味もそういう点にかかっている。…事物の本性をきわめるには攪乱的要素を除かなければならないといわれるが、自然現象ならば兎に角、社会現象についてはそう簡単にはいえない。攪乱的要素が、社会関係自身によって排除される傾向にあるということから、攪乱的要素の入りうる形態、それを除きうる形態が問題になる。それは自然科学の場合とは非常に異なったものだと思う。対象が、自然そのものではなく人間の行動だということは、対象に対して研究者が攪乱的要素を除くというのではなく、**対象自身が攪乱的要素を捨象することになる**という、経済学の対象に特有な面を示すのである。これが原理を完結した体系として展開せしめることにもなるのだ。僕は、この点がかつて経済学では、対象を模写するというだけでなく、その**方法**をも対象が示してくれるものとして、吾々はこれを模写することになるといったことがあるが、この点が明らかにされることによって、初めて**自然法則と区別された経済法則**を口にすることができる。」（宇野[1963]：98~99，強調大黒，以下同）

純粋の資本主義社会それ自体と価値法則とを混同してはならないが、ここで重要なのは、経済学における「法則性」は、自然現象のようにわれわれ分析者が操作的に抽出しうるものではなく、対象（当事者）自身が攪乱的要素を取り除くのを、いわば方法的に模写することによってのみ見出しうるということが可能だという点である。したがって、経済学における法則性は同時に「攪乱的要素の入りうる形態」でもなければならぬとされるわけである。対象の模写ならぬ、方法の模写といわれるこの方法は、しかし結局は対象自身が攪乱的要素を**捨象する**ことによって「原理

の体系としての完結性」がもたらされる点において評価されていることが看過されてはならないだろう。それは価値法則の「法則性」を問題とする以上当然のことだともいえる。

しかしながら、宇野が原理論に「体系的純化」の必然性を認めるとき、その背後にはいまま少し屈折した論理が伏在していたように思われる。

いうまでもなく、宇野は、経済的諸形態の分析に際して唯一頼りになる「抽象力」を、分析者ではなく資本主義自身もっているものとし、この歴史的な資本主義の発展の客観的な純化傾向に即してこそ、旧社会の「残滓」としての不純物ないし攪乱的要素を理論の上で「除去」することができる考えたのであった(宇野[1962]:18)。しかし宇野の場合、分析者の恣意にいわば唯物論的な根拠を与えることで「純粋化」を正当化したわけではない。むしろ資本主義の現実の発展が、理論的に想定される純粋の資本主義にますます近似するという傾向の「絶対化」を戒めているのであり、より正確には、19世紀末にはこの傾向が却って「逆転」するにもかかわらず、いや「逆転」するがゆえにますます、原理論の体系的純化が必要であると認識されているのである。**攪乱的要素を入れつつ除去する**という方向性で「純化」の意味が探られると同時に、その「純化」をしからしめる論拠は、むしろ**攪乱的要素が除去されようとするにもかかわらずそれは除去されきらない**、というところに求められているのである¹。とすれば「ゆきすぎを容れうる」「攪乱的要素の入るうる」という「方法の模写」の方法的特性は、価値法則においてのみならず、純粋資本主義の想定においても貫かれるものとしなければならないはずである。

もちろん、「にもかかわらず」という接続詞で結びあわされるこの純粋化と逆転の順序は、具体的には、発生・発展過程のあとに帝国主義段階という没落過程を資本主義がたどるという形

¹ 宇野・梅本[1976]:22~23。宇野は「逆転」という比喩に対して、いままで純化していたのが突然不純化するという意味ではなく、資本の生産力の増進が強すぎるために、不純なものを残しつつ、さらに資本主義が発展する、ということを中心に「不純化」と呼んだとしている。

で、直接には段階論の理論的分化を促したといつてよい。そしてまたこの理論的媒介環こそが、イギリスに遅れて資本主義化するドイツのような国に対して、イギリスを典型として展開された『資本論』を一面的に適用する公式主義を排し、後進国による資本主義化を資本主義の世界史的な発展段階の下に位置づけようとする新たな視角を用意したという点は、それ自体として評価されなければならない。

しかし、純粋化傾向が生み出した『資本論』とは異なり、純粋化のあとの逆転傾向が生み出した宇野理論の場合、原理を構成する論理の「純粋性」そのものにも、その経緯は「模写」されていなければならないと考えることは少なくともできるであろう。もとより歴史的な発展段階を論理的な展開過程のうちに直接反映させるべきことを主張しているわけではない。あるいは資本主義没落の必然性を基礎づける矛盾と移行の弁証法とは段階論の課題であって、原理論がなすのは、ただ資本主義の自己運動の原動力としての矛盾と循環の弁証法とにすぎないのであり、両者を混同してはならないという点こそ、原理論と段階論とを分けたときに宇野の強調したかった点ではあろう。しかし移行の弁証法と循環の弁証法を駆動する二つの矛盾はまったく無縁なのか。両者の同一視は論外としても、この二つの矛盾の内面的な関連をどうつけるかという問題はやはり原理的な問題ではないのか²。資本主義から社会主義への移行（唯物史観）についてはともかく、資本主義内部の自由主義から帝国主義への移行、純粋化から逆転への移行もまた、資本主義にとって外的な、歴史的偶然に属する問題としてすべて段階論に放逐してしまっているのか、という問いにもそれはつながっていく。もちろん原理論は、自然科学とは異なる仕方で繰り返し発現する「法則性」の客観的認識を確保しなければならないわけだが、どうじにまた分析対象への鋭い批判意識を欠如させてはならない。

² 丸山[2002]下：202の発言は措くとしても、原理論と段階論との区別は、それだけでは法則定立の自然科学と、個性記述の文化科学とを区別する新カント派の方法と区別がつかない。

新自由主義＝〈帝国〉といわれる現代資本主義の変貌に対してもまた、原理論の「純粋性」を据え置いたまま段階論、現状分析のみでこれに応接するだけでは十分でないようにも思われる。もとより以上のような問題をここで詳細に展開する準備はない。本稿では、宇野自身が当時の思想状況においてなぜ「純粋資本主義」を構想せざるをえなかったのか、これまであまり顧みられることのなかった三段階論形成の「背景」にまで射程を及ぼし、そのいくつかを点描することによって、そのきっかけを掴みたい。一見後ろ向きのこうした方途もまた、宇野を現代に生かす一つの道筋ではあろう。

（１） 日本資本主義論争批判（1935） — グローバリズム批判 —

原理を構成する論理の「純粋性」は、もちろんそれ自体として追求されなければならない側面をもっているが、しかし原理の体系的純化を要請した社会的・思想的文脈から切り離された「純粋性」がそれ自体として強調されるとき、素朴な科学主義との不当な烙印を許容してしまう余地もまた生まれるように思われる。そのためにも、宇野自身が、彼固有の「純粋資本主義論」を構想するに至った経緯を踏まえておくことが肝要であろうと思う。

ところで、戦前の宇野の経済学研究が、いわゆる日本資本主義論争に触発されながら進められたことはよく知られている。論争そのものからは距離を置きつつ、しかも1935年に発表された「資本主義の成立と農村分解の過程」（宇野[1935]）で宇野は事実上、論争そのものの批判を通じて新たな分析手法を案出したわけだが、その成果は、後の現状分析、段階論にのみ反映しているとするわけにもいかない。

講座派は、明治維新以来の日本資本主義の構造を、地主 - 小作関係による封建地代と、国家権力による半封建的土地所有とを階級的基礎とする天皇制＝絶対主義と捉え、その「純粋日本型」を強調することによって、当面の革命戦略を、社会主義革命への強行的転化の傾向をもつ「ブルジョア民主主義革命」つまり天皇制打倒と規定した。しかし講座派は、日本資本主義の特殊性を強調しながら、実際は明治維新後の日本を、事実上絶対君主制と規定したにすぎない。

明治維新後の日本資本主義の発展は疑いえないにもかかわらず、明治維新のブルジョア革命としての性格が否定されるために、講座派においては、日本はいまだに絶対王制を抜け出していないということになり、その結果封建的な土壌と、その上に聳える高度な資本主義とが、実際は遊離して捉えられることになる。

これに対し労農派は、講座派の主張するような天皇制絶対主義は、その階級的基礎を失い、すでに「遺制」と化しており、国家権力はすでにブルジョアジーの手中にある、したがって小作料も前資本主義的地代にもはや変貌していると認識する。資本主義の発展とともにやがて消滅する遺制と認識されることで、天皇制の問題は、労農派においてはその科学的分析を回避されることになる。しかし天皇制を単なる封建的残滓と捉えることにおいては講座派と同断である。

講座派にせよ、労農派にせよ、『資本論』の論理を19世紀イギリスの資本主義発展史と二重写しにするだけでなく、さらにその純粹化傾向を一般化した上で、これを基準に後進資本主義国を裁断するというマルクス自身が陥りかけた単線史観をなぞっているところがある。つまり労農派が日本資本主義の「後進性」を強調したのだとするならば、講座派はその「特殊性」を強調しつつも、その実さらに後進的であると指摘したにすぎず、両者は、一国レベルの単線的な発展史観における相対的な遅速をめぐる争っていたに過ぎないともいえる。

宇野は、日本資本主義論争の批判を通じ、間接的には『資本論』を独自に再構成して「純粹資本主義論」を構想すると同時に、直接的には、日本資本主義の構造を、「型」を永久化してその特殊性を言い募るのでもなく（講座派）、かといって普遍的な資本の原理に還元するのでもなく（労農派）、それを世界資本主義の共時的構造に即して把握するという新たな分析視角を、ここで築いたといつてよい。

宇野はそこで、後進国の資本主義化は、先進国で長期間を経て達成された機械制大工業を短時日に「移植」することによって実現するのだから、その行程はイギリスのような先進国のそれとは必然的に異なったものとならざるをえないことを指摘する。相対的過剰人口の堆積を必然

的にともなう機械制大工業を、後進国が移植することによって本源的蓄積を実現する場合には、農民層の分解が不徹底のまま相対的過剰人口も早期に定着することになるから、日本における原始的蓄積は、一方において資本主義の高度な発展を生みながら、他方において農村旧社会の分解過程を緩慢にし、封建的な小農経営の残存を強いる。

農村における分解過程の不徹底というこうした事情は、さらに農村の子女が産業予備軍として駆り出されるというわが国の特殊性を説明すると同時に、国内市場の狭隘性を媒介に、帝国主義的な外国市場の獲得への必然性をも解き明かす。つまり農村の獲得という政治的課題と、資本の対外進出という経済的課題とを折り合わせる結節点として国家主義が新たに要請されざるをえないことを指摘することによって、宇野は、天皇制を、封建的幕藩体制の単なる継続としてではなく、明治維新によって新たに作り出されたものとして捉えているといつてよからう。

宇野はそうすることによって、高額の現物小作料にせよ、天皇制にせよ、日本資本主義を特徴づける諸要因の起源が、実は講座派によってあとから「発明」されたということを見抜いていたということができる。日本資本主義の起源は、むしろ、西洋の「普遍的な」資本の原理の外的な導入の反作用として、他律的に日本に根づいたのであり、そうした自己の出生の秘密を隠蔽するために「起源」をあらためて設定する（神話化する）必要もあったというべきであろう。もちろん西洋に出生をもつ機械制大工業は、そのまま日本に定着したわけではなく、それが導入された時点における日本の歴史的條件に制約され、独自に変容を被った形態で定着することになろう。つまり、ウエスタン・インパクトの「適用」に対する「適応」として、日本資本主義もまた、帝国主義段階の世界的文脈の中にその生を享ける。宇野はこうした理解を通して、西洋の系列と交わることのない日本の土着的発展を神話化し孤立させるのではなく、日本資本主義の特殊性を、後進資本主義国一般に見られる発展経路の「典型」のひとつとして理論的に解明する糸口を掴むのである。

こうして宇野は、原理を直接に現状分析に適用する方法を斥け、段階論的規定によって媒介された原理を基準として現状分析に向かうという独自の方法を事実上編み出すのである。宇野

の現状分析の具体的成果は、主に戦後の体制的動揺期の分析に限られてはいるが、現状分析固有のこの方法は、日本資本主義の特殊性が問題とされるさいに、それを早急に日本固有の「伝統」ないし「型」に固定化する傾向が見られる場合にはつねに有効であるといつてよい。

たとえば1980年代、日本資本主義の対外的評価の上昇に際し、その歴史的起源を、徳川以来の経済外的な「イエ制度」に求めた日本的経営論や、あるいはバブル崩壊後1990年代、日本資本主義の対外的評価の凋落に際し、今度は日本の経済システムの弊害の起源を、戦時統制経済の計画化に見出す戦時期起源論などがその格好例であろう。ともあれ日本資本主義の評価をめぐるこの安易な逆転現象じたいが、講座派と労農派にも見られた、単線的一国発展史観、あるいは西洋資本主義と切り離して日本土着の発展経路を立てる並列史観に固有の現象であるといつてよからう³。

現在もまた、こうした安易な二項図式の上に、アメリカ流の「グローバリズム」席捲のなか、日本の経済システムの改革・解体こそが焦眉の急であるかの感があるが、むしろアングロサクソンの「普遍的」資本主義の原理がますます一元化していく現在においてこそ、それ固有の「矛盾」が指摘されなければならない。日本社会を歴史的に貫く固有の実体が存在しないのと同様に、西洋資本主義の同一性を担保する固有の実体もまた存在しない。だから真に疑われるべきは、むしろ西洋資本主義のほうだといふべきであろう⁴。日本資本主義論争にさいして宇野が痛感し

³ 9・11テロをめぐる解釈として、これを文明と野蛮の対立とみるフクヤマの「文明の進歩史観」と、逆に文明と文明の対立とみるハンチントンの「文明の衝突史観」とがあるが、ここにも日本資本主義論争と同じ構図が確認できる。文明の衝突史観は一見たんなる文化相対主義のように見えて、そこには西欧文明の圧倒的な優位への確信が依然として控えている。西欧と非西欧の二項を孤立させて捉える限り、それは必ず優劣の比較を呼び起こすのであり、それはまた優劣判断が容易に反転する可能性を同時に示唆している。

⁴ イギリス、フランス、アメリカのような欧米の近代化の道筋も、封建的要素から急進的かつ全面的な断絶を行ない、単線的に発展してきたのではない。たとえば、19世紀のイギリスとドイツで見られる企業家―土地貴族間の相互浸透、フランスに見られる封建的要素・国家官僚制

たのは、日本の現状の構造分析の必要性もさることながら、むしろ**普遍的な資本の原理そのものに潜む「矛盾」の抽出**であったと見なすこともできる。

もちろん原理論の普遍性と西洋資本主義の「普遍性」とは容易に混同されてはならない。原理論の普遍性は、かりに自由主義段階イギリスの純粋化(あるいは新自由主義段階アメリカの純粋化)の作用を受けるとしても、その地域的・時代的な特殊性から免れた資本主義一般に通じる「本質」、ないし資本主義の歴史的変容に対する「分析基準」としての性格においてこそ、示されなければならないはずだからである。

しかし、純化・不純化という問題関心じたい帝国主義段階の出現によって強いられ、そのことがまた原理を純粋性で緊縛し、歴史的多様化を捉える〈基準〉を原理に負荷することに必然的につながったという側面はあろう。そう考えると宇野の原理論は帝国主義段階を有効に説明するための中核理論ないし説明手続の一階梯にすぎないということになり、グローバリズムという現状は別のアプローチと方法を要請しているとも考えることもできるのかもしれない。たとえば、純粋と不純が継起的に発現したことが双方の関係を対立ないし無縁と見なすことを強い、他方グローバル資本主義段階は、純粋と不純が世界史的な同時代性を形作る二つのモメントをなしていると考えられるとするならば、新たな原理論には複層性という認識が必要であるという見方も相応の根拠がある⁵。しかしまた、帝国主義段階の世界システムにおいてすでに純粋と

とブルジョア的インタレストの相互補完的な作用、アメリカ北部の工業資本主義部門と黒人奴隷制に基盤を置く南部の農業資本主義部門間の共生関係などが指摘できる。

⁵ 小幡は「原理論のうちに複層性を意識的に埋め込んでゆこうとする立場は、帝国主義段階への移行を契機に、マルクス経済学が核として取り込んだ市場的要因と非市場的要因の関係を、今日の観点から再構築するところみである」としている(小幡[2003]:14)。またバーシェイは、仮に現代資本主義の三段階論分析を行なうとした場合、宇野が未完の段階論や現状分析に転置してしまった偶然的事件を「新しい原理論セット」のうちに理論化する歴史的時期にわれわれは移行しているのではないかと問い、グローバル化された経済は、三つのレベルが「横」転されて同時的に作用する共時的アプローチを要請しているとしている(バーシェイ[2007]:208~209)。

不純の複層はなかったのか、という問題は措くとしても、グローバリズムを下向の出発点としてあらためて原論を構成した場合、それはなおも「本質」「分析基準」としての性格を保持しうるのか、あるいは結局グローバリズム段階の中核理論を新たに立ち上げることになるか、見なすべきなのか、こちらも不明な点が多い。

原理論を不変＝普遍のものとして据え置くか、あるいは改作していくべきか、正直なところいまだ確信が持てないが、かりに不変のものとするにしても、「本質」「分析基準」とどまらない、原理そのものに潜む「矛盾」を深く掘り下げていく必要があるだろう。以下では純粋資本主義の自立性ないし基準としての性格からは幾分逸れる宇野の認識を示すことで、原理論再考の糸口を示していきたい。

（２） 原理論・段階論と理念型（1936）－ヴェーバーとスピノザー

宇野は、一方で資本主義の「純粋化」過程が現実存在したことを念頭に置きつつ、他方ではそれが決して完成することなく却って「逆転」したことを心得ながら、あるいは心得るがゆえに、なおも純粋資本主義論を構想するのである。ここに宇野のいわゆる「純粋性」に籠められた「矛盾」の一端がうかがえるといつてよからう。

たとえば丸山眞男も、ドイツのナチズムでさえ近代的な意識構造が展開していくときの不可避の形態であるとして、個と社会との同時成立を見据えた近代化批判の視角を戦前期にすでに獲得していたといわれる。「純粋化」と「逆転」の対を不用意に「近代化」と「ファシズム」の対に重ね合わせることは慎まなければならないが、少なくともこれらが同根だと考えられるとするならば、純粋化の進行が招き寄せる逆転に対する、この宇野による注目、近代化批判の意味を同時にあわせもっているといつてよいかもしれない。この視角の消失を戦時転向のメル

クマールとすることができるかどうかは議論の余地があろうが⁶、この逆転の可能性の自覚は、宇野においては戦前から戦中・戦後にかけて変わることがなかったとあってよい。ヴェーバーの方法意識に対する評価の如何はそのさい傍証としての意味をもつかもしいない。いうまでもなく、近衛新体制における大塚＝ヴェーバーの始動ならびにその丸山への影響と、宇野によるヴェーバー批判は時期を共有しているのである。

ヴェーバーは周知のように、その認識批判的政策論の構想において、政策の「目的設定」を経験科学としての経済学の範囲から外し、その目的設定のために適当な「手段の発見」と「目的の意味」を明らかにすることに、経済学の課題を限定した。しかしこれは逆にいえば、政策目標の設定が「何らかの個人的な価値判断」に委ねられてしまうということである。宇野はこれに対して、「むしろ反対に資本主義の一定の発展段階に応じて支配的地位を占める資本家的階級的利害関係にもとづいて、その**目的も手段も**決定される」と説く。

それは「社会的動向に反するような主観的価値判断によって決定された目的」をもって遂行されることもあるが、それは必ず「補正」される。それは「この過程の動向がかかる政策によって任意に変更されえないから」である。

同様の指摘は原理的規定においてもなされ、たとえば「市場」概念を「中世の都市経済」概念と同列に扱うヴェーバーの「理想型」において認められるのは、「何らかの主観的立場」によって「一面的に高揚」された無内容な「概念的な純粋性」であって、資本主義の発展過程のうちに確立された「純粋性」とは全く異なることが強調される。〈純粋〉資本主義はヴェーバーのいう「理想型」に極めて接近している（梅本・佐藤・丸山[2002]下：232），という丸山眞男の好意的な指摘を斥け、宇野は徹底してヴェーバーの「理想型」を批判するのである。

⁶ 酒井・中野・成田[1997]：141 参照。「序論」でヴェーバーの方法論批判を展開した、宇野弘蔵の『経済政策論・上巻』は1936年刊。

このヴェーバー批判を通じて宇野は、資本の物質的過程に則した原理の純粹化（方法の模写）と、その純粹化によって要請される政策目標設定との「同時並行性」を指摘するのであるが、この種の「唯物論」がスピノザの「心身二元論」に着想をえていると、宇野自身によって述懐されていることは、十分に注意されてよい。

宇野自身によるその説明がない以上、その真意は測りかねるが、たとえばアルチュセールによれば、「無神論者」スピノザは、敵のもっとも強い陣地たる神＝無限実体から始める。これは並行する二つの属性、思惟（精神）と延長（身体）の無限様態に自己を実現する。しかしスピノザの方法は、情念（身体）に対して、知性（精神）からの制圧＝改善を期待するところにあるのではない。「心身二元論」「心身並行論」の名で知られるスピノザのテーゼは、しかし精神が身体から切り離されているということでもない。精神が身体と「ともに」思考するというのであり、一方の他方に対する優越を禁じているのである。

この関係は、国家と資本とのあいだにおいても想定可能である。つまり国家（精神）は、資本（身体）から**切り離されえない**ばかりか、資本（身体）と「ともに」ありながら、資本と「ともに」思考する。国家と資本もまた、厳密に「並行関係」を保ちながら、際限のない過程を展開するのである。国家という「精神」は、ヴェーバーの認識とは反対に、資本の動向に対して、外からその行程を歪めることなく、資本という「身体」と「ともに」、あるいは資本という「身体」に「おいて」しか思考できない。

こうした理解を示すかのように、宇野は政策と原理との関係を、スピノザにおける精神と身体との関係になぞらえるのである（宇野[1973]上：476）。宇野はまた、「一方において」経済政策論を段階論として完成させる努力が、「他方において」『資本論』を純粹資本主義論の原理論として抽象させることにつながったとも述べているが、原理論と段階論との、形成史上におけるこの「同時並行性」もまた、このことと無縁ではないであろう。

「唯物論」（方法の模写＝現実的抽象）にもとづいた、国家と資本との同時成立・同時並行性の認識は、ヴェーバー「理想型」（主観的抽象）批判、スピノザ「感情論」（心身並行論）評価

を媒介に、こうして近代化批判の一翼を形成しつつ、宇野においては原理論と段階論との方法的分化となって結実していった、とひとまずはいえる。しかし原理論の純粹性が、段階論と**切り離されて**それ自体として論じられるとき、純粹資本主義論の理想型への縮退、資本がそれ自体として自立しうるかのような錯覚の生まれる余地もまた生じたといわなければならない。帝国主義段階の多様化を捉える〈基準〉を原理に負荷し、市場と非市場に境界線を引くことを原理の中心課題として求めることもまた「何らかの主観的立場」からの抽象であるとの批判をかわすことは難しい。したがって宇野が「方法の模写」ということばに込めた意味を再度原理論の中に回復し、一度は切れた段階論との関係を再度原理の中で考えていく作業がぜひとも必要であるように思われる。それが宇野理論を新カント派に回収しない方法であるように思えるのである。

（3） 自由銀行論と中央銀行論（1941）－バジヨット翻訳の意味－

スピノザが敵のもっとも強い陣地たる神から始めたのだとするなら、宇野は貨幣から始めたのだといってよい。実際宇野の事実上の処女作は「『貨幣の必然性』－ヒルファディングの貨幣理論再考察－」（1930）である。しかしここでは、起訴にともなう休職中に着手されたバジヨット『ロンバード街』の翻訳（1941）を取り上げたい。これ自体は宇野からすればいわば余技であり、さらにそれが危機的状況のなかで着手されたものであってみればなおさら、宇野原理論固有の貨幣論、信用論からは切れたものとして遇した方がいいのかもしれない。「バジヨットの原理」として知られる中央銀行の政策的裁量も、19世紀末の景気循環と金融システムの**変容**を背景としており、19世紀中葉の古典的景気循環の**反復**を前提にした原理の世界とはこの意味でもずれがある。しかし『ロンバード街』には、歴史主義的な金融システム分析にとどまらない貨幣・信用に関する重要な原理的洞察がある。

『ロンバード街』は、バジヨットがそこで多数準備制こそが「自然的制度」であると指摘したことから、意外にも、ハイエクの自由銀行論の論拠として、またその想源として見なされるこ

とがある。もちろん『ロンバード街』は自由銀行論批判をもくろんでいるのであり、バジヨットの主張は基本的に逆であるといわねばならない。『英国憲政論』でバジヨットは、独特の社会発展観を基礎に、「**純粹共和制**」の不可能性と「偽装された共和制」（立憲君主制）の永遠化を導き出したとされている。「最も不敬な帰依者」という彼に与えられた評価が正しいとするならば、バジヨットは、英国の国家構造のみならず、中央銀行たるイングランド銀行にたいしてもまた、その神話性を剥奪しながら、同時にそれを永遠化しようとする両義的な態度を取っていたと解釈できるのである。ハイエクに言質を与えるような『ロンバード街』での多数準備制評価のほめかしは、中央銀行の神話性を相対化するためのいわば思考実験であって、決して字義通り取られてはならない。

しかし、さらに重要なのは、バジヨットが「共和制」を作為的だからという理由で、一面的にこれを斥けているわけではないということである。「最も不敬な帰依者」ということばが示唆するのは、むしろ、最終的には英国国家構造に帰依しながらも、これに対する懐疑の姿勢を貫いたということである。中央銀行券もまた、国家が一方向的に押し付けたものではなく、自生的に民衆が選び取った側面があるにもかかわらず、それはやがて強制に転ずることを避けられない。こうした事態を打開するために、自由銀行制を対抗原理として作為的に導入する自由は排除できない⁷。バジヨットは「共和制」を自然な形態としては不可能としながら、それを「作為」的な形態と自覚しつつ導入することを否定しているわけではない。天皇制国家からの理不尽な拘留という尋常ならざる環境で、こうしたバジヨットの「屈折」こそが、宇野を『ロンバード街』翻訳に駆り立てたとも解釈できるのである。

宇野の述懐によれば、ヴェーバーの『一般社会経済史要論』はすでに翻訳があったために『ロンバード街』が選ばれたにすぎない。しかしそもそもヴェーバーとバジヨットの二つを候補とし

⁷ 先般流行した地域通貨は、市場に対して一見ハイエクとは真逆の立場に立つが、貨幣発行権の独占を排するという点において、彼の議論を大いに参照している側面がある。

て出版社に提示したのは宇野自身だし、つとにヴェーバーを批判していた宇野が、翻訳のす
にあるヴェーバーの不採用が出版社の側から容易に引き出せると期待したとしても別に不思議
はない。バジョットの重要性の認識がなければ、こうした慎重な拘泥の説明がつかない。バジ
ョットにおける中央銀行論と自由銀行論の両論併記は、もちろん宇野の貨幣・信用論に直接反
映していると見なすわけにはいかない。しかし純粋資本主義に潜む「矛盾」の現れのひとつとし
て、原理を再解釈していく際の極めて有効なよすがを提供しているようにも思われる。

(4) 循環の弁証法と移行の弁証法－純粋資本主義論の「矛盾」－

宇野はあるところで「資金の商品化」という事態を「労働力の商品化」および「土地の商品化」
と比較し、その特殊性を確認している。また「資金」概念の含意をめぐる、恐慌における「貸付
資本と産業資本」との衝突という形の矛盾と、「労働力商品化」の矛盾とのいずれが「資本主義
の矛盾の基本」をなすのかという点に関して、次のようにいう。

[資本主義の矛盾の]根本は労働力の商品化にあるが、そしてそれは資本の蓄積によって利潤率
が急に低下するという問題となってあらわれるが、それだけでは恐慌にならない。マルクスも
資本の過剰を説いたところで、資本が過剰になったときに、その過剰がどういう風にして始末
されるかを十分に明らかにしていない—とぼくは思う。…利潤率は下がりながらもむしろ[私的
には]蓄積を増進しようとする。だからその過剰になったということからそれだけではすぐ爆発
しない。…それを爆発させるのは、やはりちょうど商品[価値と使用価値の対立矛盾の解決]に
貨幣が必要なと同じように資本に貸付資本が必要だったんじゃないかと、こういうようにぼ
くは考えるんだ。つまりそれで資本家社会的なコントロールがなされるわけだ」(宇野[1973]
下:1008)。

宇野は、「労働力商品化」という基礎的矛盾から、分配論における「個別産業資本間の競争」としての内的矛盾をへて、社会的に締めくくるものとして「貸付資本と産業資本」の対立に至るというかたちで、「**諸矛盾の重層的契機**」を軸に資本主義の全過程を総括するという捉え方を、基本的に堅持する（宇野[1973]下：1009）。しかし「労働力商品化」の矛盾は基礎にはちがいないが、矛盾の矛盾たる所以は、「資本自身が自分自身に矛盾する、資本の蓄積が自らを無意味にする」つまり「資本の過剰」にある、という点こそを宇野は強調するのである。さらにこの「資本の過剰」は、資本が自分自身で競争して解決できるものではないから（その過剰性をみずから認識して暴露することは不可能だから）、その解決は、マルクスのように「産業資本家相互間の競争」においてではなく、「貸付資本」という他者との関係（利潤率の低下に対する利子率の上昇）を媒介にしなければならないというのである。

宇野の「純粹資本主義論」は、その展開動力＝基礎的矛盾を「労働力商品化」においていると通常は解釈される。たとえば梅本克己は、資本主義の「自己再生産の原動力としての矛盾」と、資本主義の「没落の必然性を基礎づける矛盾」とを、理論と実践との峻別という観点から明確に切り離したことを宇野の功績として讃えながら、それでも自己再生産運動の原動力としての矛盾の弁証法では、社会主義への「移行の必然性」を明らかにできないとして宇野に疑問を呈している（宇野・梅本[1976]：29）。

つまり、「労働力商品化」を資本主義のアキレス腱とする立場からすれば、対象の有限性を含蓄する「移行の弁証法」こそがその基本原理をなさなければならず、逆に、宇野のような「循環の弁証法」では、資本主義があたかも永遠に繰り返すかのごとくに説かれ、かえって資本主義の無限性を含蓄してしまう、と梅本は考えるのである。しかし宇野は、「循環の弁証法」のなかにこそ、資本主義の有限性が示されるという、梅本とは逆の認識を示している。

宇野の「循環の弁証法」は、資本主義の永遠性を示すどころではなく、悪循環を公然と維持し、不安定な景気循環の軌跡を提示することによって、むしろ資本主義の病理をそこに描き出すのである。そして、その「完全な認識」こそが、経済法則の「部分的適用」でなくその「全面的除去」を通じて、社会主義への道を却って拓くというのが宇野の認識であった。また「労働力商品

化」は必然的に「移行の弁証法」と結ぶつくわけでもない。資本は、それ自身によっては生産できない労働力商品の供給制限を、相対的過剰人口によって解除し、その自己運動の基礎を確立するのであり、資本主義の矛盾の発現としての恐慌の周期的運動は、同時に労働力商品の矛盾の現実的解決の特殊の方式でもあるからである。

しかし宇野の資本主義認識の基底には、労働力商品化の無理におとらず**資金の商品化の矛盾**もまた強く意識されていたと思われる。資本主義の自己矛盾としての「資本の過剰」を貸付資本の社会的性格によってコントロールすると宇野がいうとき、あくまでそれは原理内部の問題で、これを中央銀行の裁量的政策によって信用創造に限界を設定するという点に結びつけることは、制度と政策を原理の中に混入することを意味するのかもしれない。したがって両者のあいだには幾重にも理論的媒介が必要であると思われる。しかし「全資本制信用の軸点」たる中央銀行金庫準備の「矛盾に満ちた性格」とマルクスが記したものを媒介にして、両者は密接に結びついていようにも思われる。さらに中央銀行に付随する金融政策主体は、宇野のいう資本の「私的性格」と「社会的性格」の間に身を置き準備金を介してコントロールを行わなければならないが、これはやはり宇野が指摘するように、商品〔価値と使用価値との対立矛盾〕を貨幣が解決するというロジックと平行である。バジヨット翻訳（1941）の後、宇野が戦後まもなく、価値形態論に「人間」を導入することを提唱したことは決して偶然ではないのである（宇野・向坂共編〔1948〕）。

（５） 価値形態における「人間」（1948）－近代化批判のかなめ

宇野が、唯物史観によって経済学を基礎づけるのではなく、逆に、経済学によって始めて唯物史観が解明されると考えていたことは広く知られている。つまり唯物史観は人間生活一般から直接に導き出せるものではなく、かえってこの人間生活一般という社会的基底（経済原則）自身が、資本主義経済という特殊な社会生活を対象とする経済学（経済法則）を通じてのみ想定可能なのである。つまり、資本主義経済の解明を通じてのみ「唯物論」は主張しようとするの

である。マルクスが『資本論』を労働過程から始めないで商品から始め、資本を説いた後に初めて労働過程を説いていることの意味を、宇野はそこに見出している（宇野・梅本[1976]：

129）。

宇野はこうして、マルクスの論理を忠実に理解しようとしながら、しかも忠実になればなるほど『資本論』に示されたマルクスの叙述とは違った展開を示すという独自のスタイルを貫く。たとえば価値形態論をめぐる弁証法的展開を進めるうちに、その論理が「蒸留法」とベーム＝バヴェルクによって批判されたマルクスの労働価値説の論証と必ずしも折り合わなくなることに気づき、労働価値説の論証を冒頭部分から資本の生産過程の論理段階へと移すことで、マルクス的方法的特性をマルクス以上に徹底させるのである。

宇野原理論はこうして価値形態論の弁証法的展開を冒頭に説き、そこで商品所有者の欲望の契機を前景化しながら、きわめてユニークな貨幣発生論を説くことになる。しかしそのために宇野の価値形態論は、使用価値に対する欲望に染め上げられた自立的経済人という近代的人間像の想定から貨幣を導き出す新古典派メンガーのような貨幣発生論とかえって親和的と見なされることがある。しかしこの点に関しても、システムからの要請を反映した価値表現・価値実現の契機を主要な契機と見なし、これと使用価値に対する欲望との「矛盾」を資本主義を駆動する基本的原動力と見なしたマルクスの認識を、宇野は見逃さない。たとえば「物神性」を話題にした折に、価値による使用価値（実体）の「否定」を商品形態に見る商品の物神性論が疎外論的であるのに対し、物神性は貨幣で初めて説けるとして宇野は次のようにいう。

「…商品は相手[等価形態]にとっては使用価値なんだ、持っているほう[相対的価値形態]は価値なんだ。**分裂している**わけでしょう。ところが貨幣形態になると、使用価値そのものが価値なんだから、あらゆる人にとって価値になっちゃう。これが物神をなすわけでしょう。…等価形態はいわば物神性の形態的根拠になるんです。それを商品論でやるからむずかしくなる。**貨幣形態ではじめて物神といえる**。昔、左右田喜一郎氏が山崎覚次郎先生を批評したのはそれで

すよ。貨幣に限界効用があるかというやつ。**貨幣にはないですよ**。効用説では貨幣は説けない。」（宇野 [1973] : 711）。

注目すべきは、貨幣に限界効用がないという論点が商品の分裂ないし貨幣の物神性に結び付けられ、その際、ヴェーバーと並ぶリッケルトの偉大な弟子とされた新カント派「経済哲学者」左右田喜一郎が援用されている点である。「カント的な分析論理の立場を徹底的に追及し、その限界のもとで挫折することによって他ならぬこの限界を身をもって暴露し、そこにこの限界超越のための空間を開いた」と形容される左右田貨幣哲学の白眉は、初期の代表作『貨幣と価値』（1909）で展開された貨幣発生論である。愛着価値から対象価値へ、そこで成り立つ「評価社会」を起点にさらに媒介価値へと至る彼の貨幣発生論の道筋は分化発生論をとりながらも、それが含意するのは、貨幣概念は個人から決して導き出されえず、しかもなお個人に向かって方向と意味を与える形式的な「嚮導概念」としてアプリアリに前提されなければならないというものであった。このような構成は、マルクスの価値形態論解釈においても、使用価値に対する欲望を起点に媒介に媒介を重ねたところで、形式的な価値概念抜きでは結局貨幣概念にはたどり着けないのでは、という示唆を与える。

ところでこうした形式と内容との関係は、左右田によって数学上の極限概念と系列の各項との関係にも擬えられ、さらにこの関係は、のちに宇野を閉口させた新カント派的「文化哲学」（『文化価値と極限概念』（1922））にも影を落としている。つまり左右田が貨幣概念を嚮導概念として経済学的認識の対象界を統一的に認識しようとしたのは、じつは彼が最終的に目指す「文化価値」という非対象的なものを分析論理の立場から何とかして対象化しようとした、その苦闘の軌跡として見ることもできるわけだ。

たしかに非対象的で超越的な「文化価値」と、対象的で内在的な「貨幣概念」とのあいだには、後継の杉村廣蔵も指摘するように質的断絶「ディレンマ」が存在していることは事実である。そして杉村自身は、西南学派から影響を受けた左右田と違い、同じ新カント派でもマールブルク

学派の影響、あるいはメンガーの影響を相対的に強く受けながら経済学的対象界にむしる問題を絞り込む。しかし、カント的分析論理の二元性は、われわれがいかに合理化の道を進んでも、出発点を非合理が基礎づけている以上、われわれに世界総体の認識を求めて「無限彷徨」を強いると、左右田自身が述べている。宇野に示唆を与えた「貨幣論上の限界効用学説」（1916）で左右田は、貨幣に限界効用説が成り立ちそうで成り立たない理由として、貨幣は「凡ゆる方面に走れる目的の糸をたどって其の多岐多様の尖端に**彷徨左右**して遂に適帰する所を知らぬといふような心理状態」に陥るからだとして述べているが、このことは貨幣物神に至ってもなお、合理的経済人に刻み込まれた「二元性」「分裂」が「無限彷徨」として発現することを意味している。

カント的な分析論理の立場に徹することは、それが徹底的であればあるほど、私に対して世界を、また世界内で私を、いわば**浮遊状態**にもたらし。左右田が、経済学的認識のアプリオリとして、経済学的認識の対象界の一切の対象性を条件づける認識目的を問い、そのような認識目的として「文化価値」を定立したのも、その哲学的意義は、経済学的認識の対象界をこのような浮遊状態にもたらしことにあったといわなければならない。すなわち、左右田による経済学の**認識論的批判**は、経済学的認識の対象界の限界に思いを致すことなくそのうちに**安住**しようとする思想態度に警告し、経済学的認識の対象界の対象性を限界づけるものに視線を向けることによって、その**限界を超越**しようとする哲学的要求を覚醒しようとしたものと見るべきであろう。

そう考えると、ヴェーバーの認識批判的経済政策論に対する批判とは別に、宇野自身の純粋資本主義にも、左右田のこうした認識は受け継がれていると思われる。宇野は観念的抽象によって純粋資本主義を理念型として立ち上げ、これを理論的基準として多様な資本主義を分析するためのクライテリアをそれに要求しただけではない。カントの看過すべからざる契機は、非対象的な「認識目的」を設定することによって対象を把握しようとするのが、同時に対象の限界を炙り出し、対象を浮遊状態におとし入れ、限界を超越しようとするという意味を同時に持っている、という点であろう。

資本主義という対象認識の「客観性」と同時にその「否定性」をもともに見据えることのできる「認識拠点」を探ろうとした梅本が、資本主義分析そのもののうちに社会主義への革命戦略を織り込もうとして、その結節点を「人間的立場」（唯物史観）に求めたのに対し、宇野が社会主義イデオロギーの「消去作用」を強調したのもこの文脈において理解されなければならないだろう。たしかに資本主義認識の客観性は唯物史観によっては基礎づけられないにしても、宇野もまた、社会主義イデオロギーによるブルジョア・イデオロギーの排除によって、はじめて認識の客観性が獲得できると考えているわけだから、梅本も指摘するように、宇野においても(社会主義)イデオロギーが認識の客観性獲得の条件をなしている。しかしそれは、条件になっているだけで「その対象内容の科学的な認識自身は、資本主義がいわば抽象作用を客観的にやってくれないとできない」。

宇野においては、資本主義生産の認識の客観性は、社会主義イデオロギーではなく、資本主義自身の純粹化傾向によって保証されるのであるが(方法の模写)、この純粹化傾向はまたそれ自身、日常的意識＝ブルジョア・イデオロギーの温床でもある。宇野にとっての社会主義イデオロギーは、ほかでもないこのブルジョア・イデオロギーを「消去」という役割を担うものなのである。だから社会主義イデオロギーは、具体的内実を備えたユートピアとしてではなく、差し当たりは空虚な「理念」としてまずは捉えられていたとあってよいであろう。しかしそれは、ブルジョア・イデオロギーの覆いを剥ぐという「イデオロギー効果」において、経済学に不可欠の「理念」であるとはいえよう。少なくとも宇野の「科学とイデオロギーの峻別」は、科学のイデオロギー中立性を意味するのではない。左右田のいう文化価値は斥けられなければならないにしても、宇野の社会主義イデオロギーもまた、純粹資本主義という認識対象の限界を炙り出し、これを浮遊状態に陥れ、この限界を超越するための「嚮導概念」ないし「認識目的」として、原理論成立の強力な条件をなしている、ということはいえるだろう。

〈参照文献〉

- バーシェイ[2007], 『近代日本の社会科学—丸山眞男と宇野弘蔵の射程』NTT 出版。
- マルクス[1867], 『資本論』第一巻, 国民文庫版, 第一分冊。
- マルクス[1894], 『資本論』第三巻, 国民文庫版, 第七分冊。
- 宇野弘蔵[1930], 「『貨幣の必然性』—ヒルファディングの貨幣理論再考察—」(著作集第三巻所収) 岩波書店。
- 宇野弘蔵[1935], 「資本主義の成立と農村分解の過程」(著作集第八巻所収) 岩波書店。
- 宇野弘蔵[1936], 『経済政策論・上巻』弘文堂。
- 宇野弘蔵・向坂逸郎共編[1948], 『資本論研究—商品及交換過程』河出書房。
- 宇野弘蔵[1954], 「資金論」(著作集第四巻所収) 岩波書店。
- 宇野弘蔵[1962], 『経済学方法論』東京大学出版会。
- 宇野弘蔵[1963], 『価値論の問題点』法政大学出版局。
- 宇野弘蔵[1973], 『資本論五十年』上・下, 法政大学出版局。
- 宇野弘蔵・梅本克己[1976], 『社会科学と弁証法』岩波書店。
- 梅本克己・佐藤昇・丸山眞男[2002], 『現代日本の革新思想』上・下, 岩波現代文庫(初出は1966, 河出書房新社)。
- 小幡道昭[2003], 「グローバル資本主義と原理論」SGCIME 編『資本主義原理像の再構築』所収, 御茶の水書房。
- 酒井直樹・中野敏男・成田龍一[1997], 「『日本政治思想史研究』の作為」『大航海』18号, 新書館。

大黒弘慈[1999], 「宇野弘蔵の『純粹』—戦前・戦中の思想形成—」『批評空間』第Ⅱ期第 20 号, 太田出版。

大黒弘慈[2003], 「原理論における『純粹』の意味」SGCIME 編『資本主義原理像の再構築』所収, 御茶の水書房。

大黒弘慈[2007], 「貨幣に顕れた近代の光と闇—近代日本の経済学者—」『大航海』64 号, 新書館。